

●春日部市民文化講座（第21回）

◆日時：2016年9月28日(水) 10時（ぼぼら春日部4階会議室）～11時

◆テーマ：講演「市立医療センターにおけるアート」

講師：増村 紀一郎さん〔髹漆作家（人間国宝）〕

◆ゲスト紹介：《前掲と同じ》

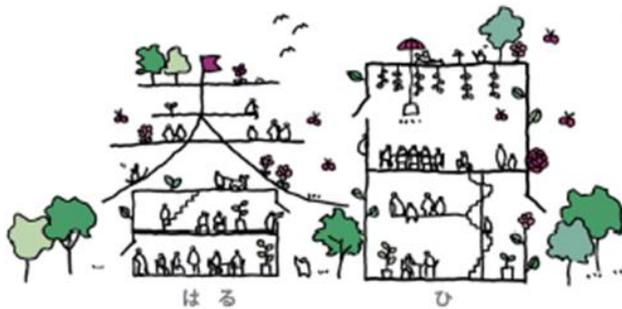
■市立医療センターにおけるアートのコンセプトは「春の日だまり」

今年7月にオープンした春日部市立医療センターの話を進めてまいりましょう。医療センターとの関わりは、平成25年11月に市から連絡があり、「市立病院を建て直すにあたりアートを取り込みたいが、検討会議の座長を務めてほしい」という依頼がありました。私は、木曾檜川村での仕事の関係もあって、長野オリンピックの時に長野県の市町村が集まる長野県自治会館のエントランスホールを飾るデザインを木曾漆器で提案し、漆のオブジェが採用された経緯があります。また、東京藝大のエントランスの入り口カウンターや柱にも漆を使ったこと



【アートコンセプト】〔医療センターHPより〕
医療の現場を「春の日だまり」に。からだところを癒すアートのたたずまい。

- 患者・家族の心に寄り添うアート
●スタッフに優しいアート
●すべての人にあたたかみのある癒しのアート



があり、建築空間で漆の作品を使うことには自信があったので、市からのボランティア要請を受けました。医療センターで働くことになる職員の皆さんや関係者の皆さんにアンケートなどを行い、『医療の現場を「春の日だまり」に。からだところを癒すアートのたたずまい』をテーマにして、厳しい冬が終わって、ホッとした春の日をイメージしてもらえるようにしていこうということで話がまとまりました。

■春の日だまりを彩る漆

私が担当したのは、1階エントランスホールに会計があり、その脇のガラス部分です。3m位の空間をもらったので、ベニヤ板で形を作り、それに麻布を漆で固め、色漆を塗ったシートを作りガラスの両面から貼りました。この作品のタイトルは「大空の景」です。春の日だまりを彩る漆の風合いが、病院を訪れる方々に、優し

い肌触りと自然な温もりを感じ取っていただければと思い、制作しました。私が春日部に移ってきたときの第一印象が「空が広いなあ」というものでした。春日部の春夏秋冬の自然の景色を抽象化してデザインしました。春日部の家紋・旗印と考えて、雲をデザインしています。伝統工芸というものは、古い物を今の人たちに見てもらうものではなくて、その時代その時の美しさを伝統的な技術にのっつた工芸品で見せることだと思います。それは、日本人の考え方をデザインすることでもあります。

春日部の家紋・旗印と考えて、雲をデザインしています。伝統工芸というものは、古い物を今の人たちに見てもらうものではなくて、その時代その時の美しさを伝統的な技術にのっつた工芸品で見せることだと思います。それは、日本人の考え方をデザインすることでもあります。



春日部の家紋・旗印と考えて、雲をデザインしています。伝統工芸というものは、古い物を今の人たちに見てもらうものではなくて、その時代その時の美しさを伝統的な技術にのっつた工芸品で見せることだと思います。それは、日本人の考え方をデザインすることでもあります。

■第一歩が踏み出されて

これまで病院というときさまざまな方々の善意で困った絵や彫刻が飾られていて、統一感のない状況が見られるというケースも多々ありましたが、今回、私たちが参加することで春日部市立医療センターのオープンの時点では、一定のコンセプトに基づいてホスピタルアートが形成できたと思います。私の漆作品も紫外線に弱いので、50年後には劣化してしまうと思います。その時に新病院で8月に出産第一号となった娘が修復してくれるような形で引き継いでくれればと思っています。現在の美意識を結集した形で今回のホスピタルアートができたと思っています。永久不変なものはありません。



【学生達とオブジェの製作風景】

【ガラス面に両側から色漆のシートを貼る】

無機質になりがちな病院、その病院に暖かい「春の日だまり」をアートで飾ってくださった皆様に感謝ですね。